

復興への歩み

遊びの会の広がり ～遊ぶ場所・集まる場所を探して～

遊びの会が発足する経過

～まずは集ることと場所～

「遊びの会」(正式名称はあしかの遊びの会)は、東日本大震災以降に発足(2012.5.1)した「一般社団法人ふくしまをリハビリで元気にする会」が子どもたちへのボランティア活動として行っているものです。

震災以前から、障害のあるお子さんたち、お母さんお父さんたちは、家族で伸び伸びと、しかも他の子どもさんと一緒に遊ぶ場所が少ない状況は続いていました。さらに、震災以降、福島県は放射能問題で、遊ぶ場所がかなり限られてしまいました。現在は、一部地域を除いては、改善されつつありますが、まだまだ震災前のように、物理的にも、気持ちの上でもうまくいきません。

遊ぶ場所が無いというのは、親御さんたちにとっても子どもと一緒に集まる場所が無いということでもあります。お母さんたちは、子どもを施設などに預かっていた日中に、ファミリーレストランで話し合いをするのがせめてもの集まりで、子どもと一緒に遊ぶというのは、震災前から、なかなか難しかったので

す。震災後は、それに拍車が掛かりました。放射能で外に出るはいけない期間もありましたし、お母さんたちも身体への影響を懸念したせいもありました。震災後、しばらくは、今まで遊べていた数少ない公共機関の会議室、ふれあいセンターや体育館は避難場所となっていて、使えるところではない状態が続きました。

そんな時に、「子どもを伸び伸びと遊ばせたい、家族や他の家族もみんなで……」とどこからもなく声が上がりました。たまたまそこに居合わせた僕は、何とかしてあげたいと思い、動くことになりましたが、社会の認識不足も含めて、苦難の日々が続くことになりました。

体育館のような公共のスペースは、被災した避難民が多く、発達に障害のある子どもたちが遊んでいると、ちょっと不思議な目で見られたりして、子どもたちもお母さんたちも切なくなるのです。また、自分の子どもが他の知らないお子さん(障害の無いお子さんたち)にご迷惑をかけないか?ということが心配で、気が気でなかったり、連れて行けないというご家族も



落書きコーナー——大きく思いきり描いてみよう



手作りのすべり台とエアポリンで遊ぶ子どもたち

遊びの場

いらっしゃいました。ということは、体育館や会議室を貸切りにしなければならなくて、これが大変でした。

しかし、一番大変だったのは、社会の偏見です。「遊びのスペースを作りたい……、しかも貸切りで、障害のある子どもたちを思い切り遊ばせたい、暴れても、突然大きな声を上げてもいいような空間にしたい……、会議室でもいいからお願いしたい」というと、どこでも「前例がない」「安全は大丈夫か?」「ケガをしたらどうするのだ?」、はたまた「会議室は傷つかないのか?何か壊したりしないか?」までいろいろありました。確かに、障害を知らない人はそう思うのかもしれませんが、その説得が大変でした。しかし、捨てる神あれば拾う神あり、郡山市の保健師さん、保育士の方たちが動いてくれて、郡山市の公共施設「郡山ユラックス熱海」からご理解をいただき、会議室を貸してくれたのです。これがスタートでした。今では、民間企業の体育館から保健センターや養護施設まで、いろいろ貸していただけるまでになりました。

手探りのスタート、そこからわかったこと

心配はいろいろありました。一番は、「障害のある子どもたちが、他の知らない子やお兄ちゃん・お姉ちゃん、年下の子どもたちと遊べるのか?」ということでした。何と言っても施設や幼稚園や保育所、学校でなかなか馴染めないお子さんたちが中心でしたから……。

構成メンバーは、はじめは同じ家族会などの仲間です。なるべく初対面を無くそうということで集めました。そんなことは不可能に近く、思い切って始めてしまいました。案ずるより生むが易し……、子どもたちはみんなで楽しそうに、しかも初対面の子ども同士でも、汗びっしょりになりながら遊び始めました。全く初めての子どもたちも交えているいろいろやっていますが、馴染めなくて遊べなかったお子さんはほとんどいません。それはたぶん、お母さんやお父さんが安心して近くで見えていたり、遊びに加わっているからだと思います。また、ボランティアの人たちが、危険行為



毛布のブランコでいっぱい揺らしてもらって大はしゃぎ

(子ども自身が傷つくとか他を傷つける行為) 以外は、割と放ったらかしにしてニコニコ勝手に遊ばせているからだと思います。懸念されていた奇声は減って、トラブルもほとんどありません。

この数年で学んだことは、「子どもは、親の安心した顔やうれしい顔が見たいんだ」ということです。要するに、自分の親が、安心して他の家族と雑談したり、お茶とか飲みながら笑ったりしているのです。一緒に遊ぶお父さんはボランティアの学生さんより弾けていたりします。そういう姿が子どもは大好きなのです。

今後の広がり

震災後5年が経過し、発足当時5家族だった遊びの会は、何の宣伝をしたわけでもないのに、今ではお断りする方が出るほどに広がっています。それは、「子どもが遊べる場所がある」や「コミュニケーションが広がる」といったお母さんたちの感想、口コミがあるからです。今ではフットサルのチームもできました。震災直後は子どもの数も減りましたが、まだまだ、遊び場所も足りません。今後は、震災地のすぐ近くの診療所のロビーでも計画中です。

震災で遊びの場が制約をかけられたことから始まったこの取り組みが、もっともっと遊びたかったであろう子どもたちの後押しになり、こうして広がっていったことが、何だか不思議な気持ちです。

岡本宏二 (福島県・一般社団法人ふくしまをリハビリで元気にする会代表)